

青年期の自立にかかわる諸問題 (7) ——モラトリウム・シンドロームとゆらぎの心理——

Psychological problems in relation to the independence of adolescence (7) —Moratorium-syndrome and psychological fluctuation in adolescence—

永 江 誠 司

Seiji Nagae
第四部 心理科

(2000年8月22日受理)

The purpose of this study was to discuss on the moratorium-syndrome and the psychological fluctuation in adolescence. The moratorium-syndrome was analyzed as six psychological aspects of egocentrism, present-centrism, lack of empathy, dependency, apathy, and psychological fluctuation. These properties of the moratorium-syndrome agreed with the findings of the international comparative-study that analyzed the opinion of junior high- and high-school students. The present study discussed on the generalization of moratorium-syndrome. Furthermore, it discussed psychologically in terms of a fluctuating man who has a psycho-social homeodynamics.

Key words : moratorium-syndrome, fluctuation, fluctuating man, psycho-social homeodynamics

モラトリウム・シンドロームの心理

大人としての自立を回避しようとする青年期のモラトリウム・シンドロームの中から、これまでの一連の研究において、ピーター・パン・シンドローム、ナルシシズム、スチューデント・アパシー、そしてシンデレラ・コンプレックス、成功回避動機、思春期やせ症をとり上げて検討してきた。表1は、これまでの研究からそれぞれのシンドロームの心理特性をまとめて示したものである。これらのシンドロームに多くみられる心理特性は何か

といえば、「自己中心性」「現在中心性」「共感性の欠如」「依存性」「無気力」、そして「ゆらぎ性」といえるだろう。

自己中心性 自分のことしか考えず、他人の気持ちを推し測ろうとしない性向、ものごとを自分の視点でしか考えず、他人の視点に立とうとしない性向のことを自己中心性という。こうした自己中心的特性は、男性のモラトリウム・シンドロームにより強くみられる。ピーター・パン・シンドロームとナルシシズムは、まさに全てにおいて自分が中心であり特別な存在である、という認識に支えられている症状であつたし、スチューデント

表 1 モラトリウム・シンドロームの心理特性

ピーター・パン・シンドローム	ナルシシズム	スチューデント・アパシー	シンデレラ・コンプレックス	成功回避動機	思春期やせ症
無責任 不安感 孤独感 性役割の葛藤 ナルシシズム ジョービニズム	自己中心性 誇大感 空想癖 自己顕示 賞賛願望 無責任 共感の欠如 嫉妬深さ 同性愛的傾向	無気力感 自己不確実感 時間的展望の欠如 耐性の欠如 男性性の欠如 自己中心性 完全主義的傾向 孤立感	依存願望 成功回避 恐怖心 自立と依存の葛藤 無気力感	依存願望 成功への不安 成功への恐怖 競争心の欠如 優越欲求の弱さ 自立と依存の葛藤	肥満への恐怖 身体像の歪み 女性性の拒否 依存願望 自己中心性 自己不信感 無力感 まじめ 負けず嫌い

・アパシーも、自分とはどんな人間なのかという自己への過剰なとらわれがその中核にあった。

女性のモラトリウム・シンドロームでは、思春期やせ症にやや自己中心的特性がみられるものの、相対的に強い自己中心的特性がみられないのはなぜだろう。アイデンティティの形成については、男女で異なる特質とプロセスのあることが指摘されている(岡本,1997)。それによると、女性の場合は、青年期のアイデンティティの確立と成人初期の親密性の獲得が並行して進行する。そのために、他者との親密な関係をもつことで女性はよりよくアイデンティティを形成していくことができるのである。これに対し、男性の場合は青年期のアイデンティティが確立された後で成人期の親密性の獲得が始る。そのために、男性は自分の自我を他者から切り離すかたちでアイデンティティを確立し、その後で他者とのつながりを図っていくことになる。

このような男女のアイデンティティ形成の違いから、青年期の男性において強い自己へのとらわれが生まれ、自己に固執する傾向を強めるのではないかと考えられる。女性においては、自己へのとらわれはあるにしても、同時に他者とのつながりに強い関心をもつ。その分、自分に固執する傾向が弱められると考えられるのである。

現在中心性 モラトリウム・シンドロームを時間的展望の概念に関係づけてみると、とくに未来への展望が不明瞭であり、さらに未来に対する強い不安をもっているところに特徴がある。その分、彼らにとって現在がなにより大切であり、そこに強くとらわれる性向をもつ。ピーター・パン・シンドローム、スチューデント・アパシー、そして思春期やせ症などには、大人になることへの拒否あるいは延期の心理が強く働いていた。そこには、成熟した大人になること、すなわち将来への不安の心理が隠されていた。自分のことに全て責任をもち、自立した生活を作り上げていくことは容易なことではない。そんなことで苦勞するより、今までのように子どものままでいたい。だれかに保護され、守られていたい。自由、気ままに暮らしていきたい。そのほうが楽勝、と彼らは考えるのである。

未来への扉を閉じて、刹那的な現在に固執する。今をがまんして将来に備えるということはしない。それが、無責任で耐性の欠如した態度と行動を生み出すのである。現在中心的特性もやや男性に強く表れるのは、男性のほうが女性より将来への不安が強いからと考えられる。

共感性の欠如 他人がどう感じているかを理解し、それと同じ感情をもつことを共感という。モラトリウム・シンドロームでは、こうした共感性が欠如あるいは弱いことが指摘される。共感の能力は、当然、自己中心性と密接に関係している。そのことが、ピーター・パン・シンドロームの孤独感、ナルシズムの共感の欠如、スチューデント・アパシーの孤立感や対人関係の困難さなど、男性中心のモラトリウム・シンドロームに共感性にかかわる心理特性が顕著に表れている理由と考えられる。

彼らの共感性の欠如は、社会性の欠如や社会的スキルの未熟さによつていと考えられる。小さいときから仲間関係を作ることが苦手で、どのようにして他者と関係をもつたらいいいかわからないのである。本質的に自己中心性の強い人格特性をもっているのも、他者を受け入れ、他者の立場に立つてものごとを考えることが難しいのである。人間関係形成の困難さは仲間関係だけでなく、両親や教師など大人との関係にも波及してトラブルを起こすことが少なくない。

依存性 他の誰かに頼りたいと思い、守られることによって満足を感じる性向を依存性という。モラトリウム・シンドロームの中で、シンデレラ・コンプレックス、成功回避動機、そして思春期やせ症において男性への強い依存願望がみられる。これらはともに女性にかかわるモラトリウム・シンドロームである。

女性のモラトリウム・シンドロームに、どうしてもこのように強い依存願望がみられるのであろうか。女性の依存性の発達は、男性のそれとは異なることが指摘されている(福島,1992;加藤,1980;渡邊,1994)。それによると、女性は青年期にあつて親や他者への依存性を残したまま自己の独立性を築き上げていく。男性が、依存性を弱めていくことにより自己の独立性を獲得していくのとは対照的である。女性は、一般に青年期から成人期にかけて親や他者への依存性を保持しながら自立していくのだが、それがモラトリウム・シンドロームのように自立回避の場合にも作用して、女性に特有な症状を引き起こす一因になっていると考えられるのである。

無気力 何をするにしてもやる気がでない、何もしたくない、何も興味がもてないといった心理、症状を無気力という。こうした無気力感、スチューデント・アパシーの中核の心理特性であるとともに、シンデレラ・コンプレックス、成功回避動機、思春期やせ症などの女性のモラトリウム・

シンドロームでも、無気力感、競争心の欠如、無力感としてみられる。男性のシンドロームでは特定の症状に非常に強く表れ、女性のシンドロームでは多くの症状に弱く表れるといった特徴をもつ。

無気力感は、一般に自分ではどうすることもできない、どうやってもコントロールできないという経験が原因となって形成される心理と考えられている(中里・松井, 1999)。男性の場合、自立にしてもアイデンティティの形成にしても、自我を他者から切り離すことによって達成していくのに対し、女性では他者との親密な関係を保つことによってそれらを達成するという違いが、無気力感の発生と程度の強さに性差を生み出す一因と考えられる。自分ではどうすることもできなかったという経験は、男性にとっては決定的な意味と強さをもって影響する。安易に他者に助けを求めたり、協力を願うことができないので、どうすることもできない状態を続けてしまうことになりやすいのである。しかし、女性の場合は他者に協力や援助を求めることを男性よりは容易に行い、またそうすることを恥ずかしいこととか、情けないこととはあまり感じない。したがって、女性ではどうすることもできないという状態を他者に依存することによって何とか切り抜けたり、そうした状態を少なくすることができるのである。

ゆらぎ性 自然界に存在するもので、じつと静止したままのものはない。時間の経過とともに必ず変化する。そして、その変化はすべて不規則な動きを含んでいる。このようなものの変化、そして変化の不規則な様子をゆらぎという(武者, 1998)。ゆらぎは、物理学や数学、あるいは工学の概念であるが、不規則な動きを含む変化の現象という意味で、モラトリウム・シンドロームの一面の心理をうまく表現しているといえる。

ピーター・パン・シンドローム、成功回避動機における不安感、ナルシズムの空想癖、スチューデント・アパシーの自己不確実感、ピーター・パン・シンドロームの性役割の葛藤、シンデレラ・コンプレックスと成功回避動機の自立と依存の葛藤、思春期やせ症の女性性の受容と拒否の葛藤など、男女のモラトリウム・シンドロームの多くに、ゆれ動く心のゆらぎ現象がみられる。つまり、モラトリウム・シンドロームにおけるゆらぎ性は、男女に共通してこのシンドロームを特徴づける心理特性といえるのである。

ゆらぎはあつて自然であり、なければ不自然といえる現象である。生体にゆらぎがなくなれば、それはもはや生を意味しない。このことは、心理

現象にも同じようにいえると考えられる。ただ、ゆらぎにも程度がある。適度のゆらぎは心身の健康を意味するが、過度のゆらぎ、異常なゆらぎは不健康あるいは病気を意味する。モラトリウム・シンドローム現象の多くは、ゆらぎが大きくまた異常で、したがって様々な心身の不健康な症状となつて表れてくるのである。

国際比較でみる日本の青年

モラトリウム・シンドロームの分析から、自己中心性、現在中心性、共感性の欠如、依存性、無気力、それにゆらぎ性という6つの心理特性を抽出して考察してきた。ところで、私たちは青年期の自立の過程を、表からではなく裏から、すなわちモラトリウム・シンドロームの側から見通していく方法(亜臨床的発達研究法)をとってきた。そうした方法を取りながら青年期の自立の過程をモラトリウム・シンドロームの側から分析してきた結果、最終的に抽出されたいわば影の側の青年のこれら6つの心理特性が、じつは表の側の青年の心理特性について調査した研究結果にじつによく似ていることを、私たちはいま指摘することができる。

中里・松井(1999)は、現代の日本の中学生・高校生の心理特性をアメリカ、中国、韓国、トルコ、キプロス、ポーランドの6か国の中学生・高校生と比較して、その特徴を明らかにした調査の結果を報告している。その中から、中学生・高校生が自らの価値観と人間関係についてたずねられた結果をみると、私たちがモラトリウム・シンドロームから抽出した心理特性とじつに一致していることがわかる。次に、その結果についてみてみよう。

自分中心的傾向 価値観についての質問に答えられた結果は、次のとおりである。まず、「人生は自分のことでなく人のことを考えることが大切だ」という質問に対して、「まったくそう思う」と肯定的に答えた結果をみると、中国(28.0%)、ポーランド(22.5%)、キプロス(22.2%)、アメリカ(20.2%)で多く、日本(11.4%)、トルコ(8.5%)、韓国(4.0%)では少なくなっている。日本の若者にも、自分のことは考えるけれども人のことは考えない、という自己中心的傾向が強く表れている。また、「皆が幸福にならなければ個人の幸福はない」という質問に対して肯定的に答えた結果をみると、キプロス(56.3%)、トルコ(47.6%)で多く、中国(20.0%)、アメリカ(17.8%)、韓国(17.1%)、

ポーランド (16.2%), 日本 (15.9%) では少なくともなっている。日本の青年は、7か国の中で最も低い数値であった。これらの結果から、日本の青年は自分だけでなく周りの人々や社会のことも大切に考える傾向が弱く、社会に背を向けた自分中心の考え方をする者が多いといえる。これらの結果は、モラトリウム・シンドロームの心理特性として抽出された自己中心性に一致している。

将来のことを考えない 「将来のために努力する」という質問に対して肯定的に答えた結果をみると、中国 (55.7%), トルコ (54.4%), 韓国 (48.3%) で多く、アメリカ (25.2%), ポーランド (23.8%), 日本 (18.7%) で少なくなっている。日本の青年が最も低い数値になっている。日本の青年は、自分には未来があり、それは今努力することによって良くも悪くもなる、とは考えていないようである。将来のことはあまり考えず、努力を嫌う傾向が表れている。また、「人生は運に左右されることが多い」という質問に対して肯定的に答えた結果をみると、日本 (27.6%), トルコ (18.8%), キプロス (17.6%) で多く、韓国 (11.9%), 中国 (9.9%), アメリカ (7.9%) で少なくなっている。ここでも、日本の青年は人生は運ではないと考える者が少なく、自分の人生を自分で切り開いていこうとする積極性に欠ける傾向、あるいは自分ではどうすることもできないというあきらめの傾向が表れている。同じような結果は、日本の高校生の「現在享楽志向」の増加として千石 (1998) によっても指摘されている。これらの結果は、いずれもモラトリウム・シンドロームの心理特性でみられた現在中心性、あるいは無気力に一致している。

人の気持ちがわからない 人間関係についての質問に答えられた結果は、次のとおりである。「人の気持ちがわかるほうだ」という質問に対して、「まったくそのとおり」と肯定的に答えた結果をみると、トルコ (64.5%), アメリカ (58.5%), キプロス (57.2%), ポーランド (41.5%) で多く、中国 (29.8%), 韓国 (23.0%), 日本 (12.7%) で少なくなっている。この質問は共感性についてたずねたものだが、日本の青年は7か国の中で最も低い数値になっている。ここから、日本の青年は人の気持ちがわからない、共感能力が著しく弱くなっているといえるだろう。また、「悲しんでいる人を見ると自分も悲しくなる」という質問に対して肯定的に答えた結果をみると、トルコ (64.4%), ポーランド (64.0%), キプロス (58.8%), アメリカ (56.0%) で多く、韓国 (24.4%), 中国 (24.3%), 日本 (24.2%) で少なくなっている。日本の青年

は、他人の悲しみなどの感情に鈍感になっているといえるだろう。つまり、共感性が低く、人の気持ちはわからず、人が悲しんでいても感じないのである。さらに、「人の立場をよく考えて行動する」という質問に対して肯定的に答えた結果をみると、トルコ (60.6%), アメリカ (54.9%), キプロス (42.4%) で多く、韓国 (18.8%), 中国 (14.4%), 日本 (13.1%) で少なくなっている。ここでも、日本の青年は人の立場を考えない、思いやれない傾向が強く示されている。これらの結果は、モラトリウム・シンドロームの心理特性でみられた共感性の欠如に一致している。

がまんができない 「私はがまん強いほうだ」という質問に対する肯定的な答えの結果は、トルコ (51.3%), アメリカ (39.8%), キプロス (29.7%) で多く、ポーランド (15.1%), 日本 (12.1%), 韓国 (11.8%) などで少なくなっている。人に頼らず、人とうまくやっていくためにはがまんすること、自制心が必要である。そのがまん強さが、日本の青年には欠けているのである。そのため、どうしても人に頼ってしまう、依存してしまう、あるいはあきらめてしまう傾向が強く出てくることになる。この結果は、モラトリウム・シンドロームの心理特性でみられた依存性、あるいは無気力に関係していると考えられる。

モラトリウム・シンドロームの一般化現象

国際比較でみた日本の青年の価値観および人間関係の特徴は、自己中心的で社会性がなく、がまん強さに欠け、刹那的で共感性がないということになる。日本の青年にとつてかなり厳しい分析結果が出ているように思えるが、客観的な資料に基づく結果なので受け入れざるをえない。これらの結果のもつ重みはどこにあるかと考えてみると、それはこうした心理特性が平均的な日本の青年、多くの日本の青年の心理特性になっている、というところにあると思われる。ということは、日本の青年のこれらの心理特性が、これまで考察してきたモラトリウム・シンドロームの心理特性とおおかた一致しているところから、モラトリウム・シンドロームという症状が、もはや特定・小数の青年の心理特性とはいえない、ということの意味している。

つまり、モラトリウム・シンドロームの一般化現象が起っているということなのである。そのこと自体は、何も目新しい主張ではない。すでに、小此木 (1978) などにおいてモラトリウム人間の

大衆化は指摘されてきたところである。ただ、現代の日本の青年の心理特性はこれまでのようなモラトリウム人間としてだけでは、正確、適正にとらえることができなくなってしまうのではないかと考える。私たちは、モラトリウム・シンドロームの考察から、これまでいわれてきたモラトリウム人間とは少し違った、新たな心理特性をもった青年が生まれてきている、と考えている。

それでは、その新しい心理特性とは何なのだろうか。それをもった人間とは、一体どのような人間なのだろうか。私たちは、この間に答える鍵がモラトリウム・シンドロームの心理特性の中で残された1つの特性、男女のシンドロームで共通にみられた特性、「ゆらぎ性」にあると考えている。ゆらぎ人間。これこそ私たちが探し求めてきた新しい心の世界をもった人間なのではないか。そう考えているのである。それでは、ゆらぎ人間とは一体どのような人間なのだろうか。この間に答えるために、私たちは「ゆらぎ」と関係の深い「カオス」についてまず考えてみる。その上で、ゆらぎ人間とは何かについて述べてみたいと思う。

カオスとは何か

「橋の上に立つて、一枚の木の葉が流れを下ってくるのをながめているとしよう。それは小さな渦に巻き込まれたり、渦を逃れたり、あるいは少し下流の渦に再び巻き込まれたりするかもしれない。橋の上流側でこんな現象が起っているときに、次に下流側に木の葉が現れたときどうなっているかを推測するのは意味がない。なにしろ、木の葉の位置が少し変わっただけで、以後の道筋はまるで変わってしまうからである」

初めの小さな変化が、後の大きな変化をもたらして予測不可能になってしまうというカオスの特徴を、パーシヴァル (1994) はこのような例で説明している。こうしたカオスとよばれる現象は、天候の変化や心臓の鼓動あるいは株価の変動など、自然界や私たちの身体あるいは日常生活のいたるところでみられるといわれている。

ところで、このカオスの現象は私たちの心のほたらきや行動とも関係しているのだろうか。カオスとは、本来、数学、物理学あるいは工学の領域で問題とされる現象である。それを人間の心理現象に関係づけてみることは、決して容易なことではないだろう。これまで、そうした試みを行ったものはなくはないが、多くはカオスということばを混沌、不明性あるいは不安定性を意味するもの

として使っているだけで、それ以上の展開のない場合がほとんどである。ただ、最近になってアメリカ心理学会でカオスの心理学的意味を問う新しい動き、試みが出てきている (Barton, 1994; Frank & Phyllis, 1997)。ここではこうした流れを受けて、カオスと心との関係について少し深く踏み込んで考えてみたいと思う。それはおそらく困難な仕事になるかもしれないが、挑戦してみる価値はあると考える。

決定論的法則 物語の結末がわかっているような小説を、興味をもって読みはじめる人はいないだろう。はじめから犯人のわかっているサスペンス映画を、喜んで見ようとする人も少ないであろう。結末がどうなるかわからないからワクワクしながら読む。犯人がわからないからドキドキしながら見るのではないだろうか。ニュートンにはじまる古典力学では、この宇宙は決定論的法則のもとにあり、そこで起るすべての事象は予測可能であると考えられてきた (徳永, 1993)。究極的には、銀河系を支配する自然法則も、人類を支配する自然法則も同じと考え、いずれは人口の変動や伝染病の流行、あるいは株価や為替相場の変動まで、私たち人間社会のあらゆる出来事さえも予測できるようになると考えられている (Barton, 1994)。この自然観、世界観からすれば、私たち人間のすべての行動や心理現象も、あるいは人生そのものも、結末のわかったストーリーということになるのかもしれない。しかし、こうした古典力学からする世界観あるいは人間観は、はたして妥当なものなのだろうか。

ニュートンの古典力学は、決定論的法則によって自然現象を予測しようとする。例えば、太陽は日の出の時刻に東から現れ、日の入りの時刻に西へ沈む。この運行によって1日24時間が正確に刻まれていく。そこに、ある日突然、太陽が西から昇り東へ沈んだり、1日が18時間になったりといった不規則な事態が発生することはない。太陽の運行は、過去から未来にわたり正確に予測することが可能なのである。

しかしながら、私たちの生活の中で予測不可能なことは、それこそたくさんある。蛇口からいつ水が漏れ出してくるのか、2か月後はどんな天気になるのか、ある生物の翌年の個体数はいくつになるのか。そういったことを科学的法則にしたがって正確に予測することは、今日でも不可能なのである。さらにまた、こうした複雑な状態を予測すること自体が、本来的に限界のあることもわかってきた。そこへ浮上してきた新しい力学の原理

がカオス理論なのである。

カオス理論 カオス理論におけるカオスとは「あるシステム(系)が確固たる規則(決定論的法則)にしたがって変化しているにもかかわらず、非常に複雑で不規則かつ不安定なふるまいをして、遠い将来における状態がまったく予測できない現象」のことをいう(合原,1993)。つまり、カオスとは決定論的法則にしたがうシステムでありながら、決まりきった単純なふるまいではなく、きわめて複雑で不規則、かつ不安定なふるまいをして、将来における状態が予測不可能な現象のことをいうのである。カオスは、初期の小さな誤差が後の巨大な誤差を生み出し、もはやどのような変化が起るのか予測不可能な状態をさしているのである。つまり、「初期条件に対する鋭敏な依存性」にカオスの最大の特徴があるのがある。

例えば、蛇口から流れ落ちる水の現象でそのことを説明してみよう。蛇口を少しだけ開いて水を流すと、速度がおそいので水はなめらかな一筋の線として流れ落ちる。ところが、もう少し蛇口を開いてみると水はねじれた形状の無秩序な乱流となって流れ落ちようになる。この現象は、まさに規則的に流れ落ちていた水が、ある時点から複雑で不規則な流れに変化してカオス状態になったことを示している。最初はほんの小さな水の流れの変動が、ある時点から突然、巨大な乱流になってしまうのである。あなたの近くに水道の蛇口があればぜひ試してみしてほしい。あなたは、目の前でカオス現象を確認することができるだろう。

カオスは、確固たる決定論に支配されているにもかかわらず、その解のふるまいはまるで生き物のようにゆらぐといわれる。つまり、カオス現象は「ゆらぎ」を生むと考えられるのである。さらに、カオスは数学、物理学、工学の領域だけでなく、脳神経系、免疫系、遺伝系に代表される生体システムの領域さえもその視野にとらえようとしている。脳波、眼球運動、音声、呼吸、心拍などもカオスと関係する現象とみられているのである(Frank & Phyllis,1997)。例えば、健康者の眼球はつねに微妙にかつ不規則にゆらいでいるが、このゆらぎは私たちが視覚を通してものを認知するのに欠くことのできない現象なのである。まさに眼球がゆらいでいるからこそ、私たちはものを見ることができるのである。呼吸についても、安静時や睡眠時のそれが規則的な運動ではなく、長さや大きさの異なる不規則的なゆらぎ運動であることがわかっている(赤木,1995)。

また、脳波や心拍など生体に生ずる時系列デー

タをカオス解析する最近のバイオカオスの研究から、合原(1993)はホメオスタシス(恒常性維持機能)に加えて、ホメオダイナミクスという新しい生体維持機能の概念をカオスに関係づけながら提案している。ホメオダイナミクスとは何か、次にみてみよう。

ホメオダイナミクス

動的恒常性維持機能 生体に起る諸現象は、健康なときにはカオスの的にゆらいでいて、不健康になるとむしろ規則的になることがバイオカオスの研究から明らかにされている。例えば、健康な心臓の鼓動には不規則なゆらぎがみられるのだが、心臓発作の起る前の鼓動はむしろ規則的であることがわかっている。また、健康者の脳波はより複雑なゆらぎをみせるのに対し、てんかん患者のけいれん時の脳波は単純なゆらぎを示すことも報告されている(Pool,1989)。このように、心電図や脳波の波形がカオス的であり、適度のゆらぎをもっているときほど生体は健康な状態にあり、外界の変化に柔軟に対応できるのに対し、波形が単純で規則的であるほど生体は病的な状態にあり、外界の変化に影響を受けて適切な対応ができなくなることがわかっているのである。つまり、脳や生体は自然にカオスを用いて自己制御を行っていると考えられるのである。

このことは、従来の生体システムのとらえ方に大きな見直しを求めるものである。従来、生体は一定の定常状態を維持するホメオスタシス(恒常性維持機能)によって生命を維持しているものと考えられてきた。例えば、体内の塩分が少なくなれば生体は自然に塩分を摂取しようとする。体の状態を一定に保とうとする機能が働くからである。ところが、生体はその状態を時間的に一定に維持するより、むしろカオスを典型例とする動的変動状態を積極的に作り出すことで健康状態を保ち、その機能を発現させている可能性のあることが示されたわけである。考えてみれば、生物は進化の過程で安定性を捨てることではじめて走ったり飛んだりすることを可能とし、生命存続能力をより高めてきたわけだから、この動的状態を作り出すことで生命を維持しているという考え方は自然な発想である、というわけである。

このようなカオスを典型例とするダイナミカルな状態を積極的に自律生成することによって機能を維持する生体の制御原理を、合原(1993)はホメオダイナミクスと呼んだのである。従来のホメ

オスタシスを静的恒常性維持機能とすれば、ホメオダイナミクスはいわば動的恒常性維持機能といえるだろう。

心理・社会的ホメオダイナミクス 私たちの生体は、不規則なゆらぎをもつカオス状態にあるときにむしろ健康であるというホメオダイナミクスの考え方は、確かに生理レベルでいえることである。しかし、例えば脳波や心拍の変化が心理的变化を表す指標であるときとみなすことは、心理学的に問題はないと考えられる。そうであるならば、ホメオダイナミクスの概念を心理あるいは行動レベルにまで敷衍して考えることは、それほど不合理なものとはいえないだろう。秩序が乱れ、先行きの予測も困難な時代を生きる現代人の心理と行動、とりわけ若者たちのそれを、「心理・社会的ホメオダイナミクス」の視点からとらえ直していくことができないか。つまり、私たちの心理と社会的行動も規則的なシステムでありながら、その中に不規則にゆらぐシステムを内包しており、その動的変動システムが外部環境の変化に対して生体を適応的に調整していく。そのように考えられないだろうか。

もちろん、私たちの心理や社会的行動がいかにカオス的に見えたとしても、それをいわゆるカオス理論によって研究していくことは、そう簡単なことではないだろう。しかし、それらを心理・社会的ホメオダイナミクスというカオス理論の観点から解釈してみることはできるのではないかと思う。予測困難な時代を生きる私たちの心が、心理・社会的ホメオダイナミクスのシステムを獲得できれば、環境や社会の多様な変化に対してより適応的に対処できるといえるだろう。それは、例えば肉食動物に狙われている弱小動物が、襲撃を受けて逃げるときに、ただ直線的に逃げるだけでなく、突然、相手が予測できないような跳びはね方をして身をおかわす、カオスの行動パターンのシステムに似ているといえるだろう。

以上みてきたように、生体の生理と心理のカオス現象はゆらぎを生むと考えることができる。カオスの生むゆらぎは、生体機能および心理機能の制御システムとして、すなわちホメオダイナミクス（あるいは心理・社会的ホメオダイナミクス）として働くといえるのではないだろうか。

ところで、生体・心理機能の制御システムとして働くホメオダイナミクス（心理・社会的ホメオダイナミクス）の本質といえる「ゆらぎ」とは、一体どのようなものなのだろうか。カオスのゆらぎも含めて、広くゆらぎの意味するところを、こ

こであらためて考えてみたいと思う。

ゆらぎとは何か

ゆらぎ現象 「1940年にアメリカのワシントン州にあるタコマという所に、長さ85メートル、幅12メートルのつり橋がつくられた。この橋は少し風が吹くとゆらゆらとよく左右にゆれる傾向があった。開通式から4か月たった11月7日の朝のこと、風速が毎時70キロメートルに達する横風が吹き始めたところ、このタコマ橋は横ゆれを始め、それと同時に路面のねじれ運動が加わってきた。その路面を自動車が1台よたよたと走って行く。直ちに通行止めの処置がとられたが、風速が大きくなってゆくわけでもないのに橋の横ゆれとねじれ運動はますます激しくなつてゆき、ついに路面の一部が破壊し水面に落下するのについで、気球から空気が抜けるようにつり橋のワイヤーがたるんで橋全体が水面に落ちてしまった」

タコマ橋の崩壊は映像にのこされており、テレビでその映像を見た人も多いと思う。その後の調査で、このつり橋の剛性は十分でなく、路面のねじれ運動が風の乱流運動と共振したことにより、ねじれ振動が増大して破壊されてしまったことがわかっている。武者（1980）は、この破壊がいわゆる「ゆらぎ」によって起つたものとしてこのように紹介している。

また、和田（1997）は宮本武蔵の代表的な書物である「五輪の書」の水の巻より次の文章を引用して、武蔵が心のゆらぎの意義に気づいていたことを指摘している。すなわち「心を静かにゆるがせて、そのゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬように、よくよく吟味すべし。静かなる時も心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず」と。武蔵は、心のゆらぎこそ兵法の極意であることを看破していたのである。

ろうそくの炎のかすかなゆれ、地震による建物のゆれ、台風の風速の変動、樹木の年輪の間隔のひらきにみられる過去の気温の変動、高速道路上の自動車の流れにみられる群れの現象。私たちの自然と生活環境には、さまざまなゆらぎ現象がみられる。そして、ゆらぎは脳波、心拍、体温、眼球、さらに意識や気分など、私たちの生体と心理の多くの現象にもみられるのである。私たちの心理とゆらぎ、そこにどのような関係があるのか、考えてみたい。

ゆらぎ ゆらぎとは、一般に平均量からの個々の値のずれ、または平均値の近くで変動する現象

全体のことを意味しており、その大きさは標準偏差で測ることができるものをいう。先に示したように、私たちの周りには多種多様なゆらぎ現象がみられる。陽の光、風、気温、川の流れ、波、音楽、蟬の鳴き声、蜂の羽音、心拍、血圧、体温、脳波、眼球、音声、そして意識や気分など、自然現象、生体のリズム、そして私たちの心のはたらしにもゆらぎ現象がみられるのである。

女性の基礎体温の年間変化をみると日々ゆらいであり、また、ある一定の周期をもってゆらぎを繰り返していることが指摘されている（和田, 1997）。さらに、快・不快の感情も受けた刺激のゆらぎや生体内部のゆらぎと関係のあることも指摘されている（武者, 1999）。このように、自然界にあるものでゆらいでないものはない、といっても過言ではないだろう。私たちの心と身体の常態はゆらぎにあり、ゆらぎがなくなった時は生体の死を意味しているのである。さらにいえば、エリクソンの個体発達分化説も、発達というものを例えば青年期であれば同一性対同一性の拡散といった、2項間のゆらぎを通して達成されるものとして考案されていたのである。エリクソンの発達論の特徴の1つは、ゆらぎにあったといえるのである。

ゆらぎ人間の誕生

カオスの時代 私たちの自然環境、社会、家族、そして自らの人生のそれぞれは、確かにある時点までは比較的秩序正しく、安定的に一定の規則に基づいて推移しているように見える。しかし、それがあある時点から突然に無秩序で不安定な変化、変動を示すことが起ってくる。ただ、そうした時点を正確に予測することはきわめて難しいことである。急激に進行している自然環境破壊、短期間に起った経済的バブルの崩壊、急増する家族崩壊や学級崩壊、そして非行、不登校、病氣、犯罪、自殺などにみられる日常生活や人生の破綻。こうしたカオスの現象は、規則正しく安定した日常生活の中で起ったほんのささいな出来事が、後に大きな生態の破壊、経済の破綻、人間関係の崩壊、そして心理的葛藤やストレスとなり、ある日ある時、突然に発生することが多いといえるだろう。カオスの時代とは、このように秩序と無秩序、安定と不安定、建設と破壊をともに内包している時代なのである。

モラトリアムの時代とは、自らの社会的責任や義務を一時棚上げし、それを遂行することを猶予

されている時代のことをさしていた。エリクソン（1978）は、青年期のモラトリアムを単なる空白の期間とみるのではなく、大人になるために必要な期間とみた。この期間に青年は社会的な役割実験を通して大人としてのアイデンティティを築いていくわけである。エリクソンのモラトリアムには、このように積極的な意味がこめられていた。明確なアイデンティティを形成すること、それが青年期の最大の発達課題であり、それを保証しているのが青年期というモラトリアムだと考えられたのである。

しかし、私たちがこれまでみてきたように、現代の青年は明確なアイデンティティの形成のみを自らの目標としているようには思えない。もちろん、そうしたアイデンティティ形成型の若者も少なからずいるのだが、一方で明確なアイデンティティをもつことを回避する青年も増えているのである。少なくとも一極型のアイデンティティではなく、分極型のアイデンティティ形成をめざしているように思える。前者のアイデンティティは「あれかこれか」の基準で判断し行動を選択していく。後者のアイデンティティは「あれとこれと」の基準で判断し行動を選択していく。

カオスの時代においては、一極型のアイデンティティのみがどれにもまして適応力をもっているとはいえなくなった。秩序、安定、建設の時代であれば、従来通りこの型のアイデンティティが最も適応力をもつとついいていいのだろうが、無秩序、不安定、崩壊を孕むカオスの時代であれば、一極型のアイデンティティは、もしかしたら応用の効きにくい、もろい面をもっているかもしれない。それよりむしろ分極型のアイデンティティの方が、時代や状況の変化に応じて自らの分極化した判断基準の間を適宜ゆらぎながら移動し、その時々により最適な判断を下し、行動を選択していけるといえるのである。

ゆらぎ人間の心理 分極型のアイデンティティを形成した若者たちは、ゆらぎ人間の典型とみることができるだろう。それでは、ゆらぎ人間とはどんな心理特徴をもっている人間なのだろうか。

ゆらぎ人間の心理は、心理・社会的ホメオダイナミクスのシステムによって特徴づけられる。ホメオダイナミクスとは、生体が自らの内部状態を一定に維持するのではなく、むしろカオス的に動的変動状態を作り出して自らの内的状態を保とうとする仕組みであった。そのシステムの方が、外部環境の変化に対して適応的に対処できる利点をもっているのである。このことは、単に生理レベ

ルだけでなく、心理・行動レベルにも当てはめることができるのではないか、というのが私たちの見解である。

心理・社会的ホメオダイナミクスは、ゆらぎのメカニズムによって自らの心理的、行動的恒常性を維持するように働く。それでは、分極型アイデンティティの心理・社会的ホメオダイナミクスは、どのようなゆらぎ特性をもっているのだろうか。そこで、ここではエリクソン (1978) によるアイデンティティの心理構造にならって、分極型アイデンティティのゆらぎ特性を孕んだ心理構造について考えてみよう。

①時間的展望にかかわる意識については「現在中心」であり、未来への展望は短期的であって長期的見通しはもっていない。なぜなら、遠い将来については自分はもちろん大人でも予測するのが困難だからである。したがって、ある程度予測可能な近い未来と現在が自らの時間のすべてであり、当面この時間の幅の中でゆらぎながら判断しようとする。②自意識のあり方については、現実生活の中で自分を客観的にとらえている側面とともに、「自己中心性」から自意識過剰になっている側面がある。③社会的価値の選択にかかわる態度については、社会で望ましいとされる価値を肯定する側面と、社会で望ましくないとされる価値を受け入れようとする側面をもつ。前者は大人の重視する価値であることが多いのに対し、後者は若者の側の価値であることが多いといえる。④社会的役割のとり方に対する態度については、自己にかかわる事柄や他者に対しては積極的に社会的役割を担うが、「社会性・共感性の弱さ」から自己とかわり合えない場合は社会的役割を担わず、自己決定を回避しようとする。

そして、⑤アイデンティティの状態に対する意識については、自己のアイデンティティについて確信をもっているが、それは恒久的なものではなく、将来において変化する可能性がある、あるいは変化してもよいと認識している。⑥性的アイデンティティについては、生物学的、社会的な自己の性に対してだけでなく、少なくとも部分的には異性のそれをも肯定的に受け入れようとする態度をもつ。女性が、知性や活動性といった男性役割を肯定的に受け入れ、男性が美しさとか優しさといった女性役割に魅力を感じてそれを受け入れようとする傾向は、こうした態度を反映しているといえる。⑦権威・指導性への意識については、自己の利害にかかわるときは権威を身につけ指導性を発揮してそれを守ろうとするが、そうでない場

合は一般に指導、支配といった社会的関係を嫌い、回避しようとする。⑧信念・イデオロギーにかかわる態度については、一般にはそれらにかかわることを恐れ、回避しようとする態度をもつが、自己の生活信条に深くかかわることがらについては強い態度をもっている。

このようなものとして分極型アイデンティティの心理構造をみると、そこでは自己中心性、現在中心性、共感性の弱さを特徴としたゆらぎが起動し、それが心理・社会的ホメオダイナミクスとして生体の適応に働いていると考えられる。分極型アイデンティティは、このメカニズムによって現代の若者の心理・社会的適応を支えている、といえるのではないだろうか。ただ、ゆらぎ人間のアイデンティティの型は分極型の他にも存在する。それは、分散型アイデンティティと拡散型アイデンティティである。

ゆらぎ人間の型 分散型アイデンティティおよび拡散型アイデンティティは、分極型アイデンティティあるいは一極型アイデンティティとどう違うのだろうか。それは、端的に言うと「生き方」の違いにあるといえる。一極型アイデンティティ人間の生き方は、「あれかこれか」型であった。そして、分極型アイデンティティ人間の生き方は、「あれとこれと」型であった。これらに対して、分散型アイデンティティ人間の生き方は「あれもこれも」型であり、拡散型アイデンティティ人間の生き方は「あれでもない、これでもない」型といえるだろう。分散型アイデンティティ人間は、「あれもこれも」の基準で判断するので、適応的な行動の選択がうまくとれない。また、拡散型アイデンティティ人間は、「あれでもない、これでもない」の基準で判断するので、どんな行動も積極的に選択できないで、停滞あるいは退行してしまうことになる。

一極型アイデンティティ人間の「あれかこれか」型の生き方は、青年期に選び、作り上げた思想、職業、妻子、家庭のそれぞれについて、アイデンティティを生涯立派に全うするものであった (小此木, 1978)。1つの自己を選択するには、別な自己の可能性を切り捨てなければならない。例えば、一般にある職業を選ぶことは、その他の職業を選ぶことによる自己の可能性を捨てることであり、またある女性を妻に選ぶことは、他の女性とのかかわりを否定することでもある。このように、アイデンティティ人間の生き方というのは、自分とかわり合える集団、組織、個人との関係に責任をもち、義務を果たすところにその本質が

あった。

ゆらぎ人間は、こうした一極型アイデンティティ人間とは異なる生き方を示している。ゆらぎ人間には、先に述べたようにアイデンティティの分極型、分散型、拡散型があるが、これらはそのゆらぎ方の質と程度に違いがある。ゆらぎの極についていえば、分極型は小数の極、分散型は多数の極、拡散型は無数の極をもつために、ゆらぎの方向、頻度、大きさが異なる。分極型は特定の方向で、頻度も少なく、適度なゆらぎを示すが、分散型は多様な方向で、頻度もやや多く、比較的大きなゆらぎを示す。拡散型の場合は、不特定の方向で、頻度は多く、大きなゆらぎを示す。そして、これがさらに進行するとゆらぎは弱くなり、やがて規則的なものになってしまうと考えられる。

拡散型のゆらぎは、エリクソン (1978) のいうように心理的には病的状態を引き起こす。端的に言えば、自己喪失の状態といえるだろう。また、分散型のゆらぎは、小此木 (1978) のいうようにあれもこれも型のモラトリアム・シンドロームを生み出す。このシンドロームについては、これまで詳しくふれてきたところである。

分極型のゆらぎは、一極型と分散型の間にあって新しい適応の型を示す。この型は、一極型のようにゆらぎないアイデンティティにもとづいて確固とした判断と適応的行動をとれない代わりに、外部環境あるいは条件の変化に柔軟に対応できないということもない。また、分散型のようにあれもこれもと選択肢を増やし、結局、自分で決断し行動を選択することができず、外部環境あるいは条件の変化に影響を受けて、自分が次々に変わってしまうようなこともない。分極型のゆらぎは、この選択でダメなら、もうひとつ別の選択を試みよう、外部環境あるいは条件が変わった場合は、それに応じて自分の中の判断基準を1つの極からもう1つの極へ移して試してみよう、というように働くのである。「あれかこれか」の選択でもなく、また「あれもこれも」の選択でもない。「あれとこれと」の間でゆらぎながら最適の判断を選択していく。そのような適応の型を示すのが、新しいゆらぎ人間の適応の仕方なのである。

例えば、成功回避動機と性役割との関係について調べた研究 (Gayton, Have, Barnes, Ozman, & Bassett, 1978) から、女性性と男性性を併せもつ両性型の性役割をもっている女性が、成功への怖れが弱く、精神的健康度が高いという結果が示されている。これなどは、女性が女性性と男性性という2つの極を内的にもつことによって、両者の

間をゆらぎながら適切な判断を行い、適応的な行動を選択している分極型のゆらぎ人間の特徴を示しているといえるだろう。

ゆらぎない一本の価値基準をもったアイデンティティより、少なくともそれに代わるもう一本の価値基準を準備してもっているアイデンティティ。この生き方しかない、この生き方でやっていく、といった強くて変えようのないアイデンティティではなく、この生き方でダメならもう1つ別の生き方でやってみる、といった適宜に生き方を変えていけるゆらぎ性のアイデンティティ。アイデンティティ・ステータスを規定している職業、政治、価値観に対する態度について、それぞれ分極した考え方の基点をもっているアイデンティティ。それが、適応力のある新しいタイプのゆらぎ人間のアイデンティティなのである。

ゆらぎ人間としての自立

社会的契約と共感性 分極型アイデンティティをもったゆらぎ人間の心理構造は、自己中心性、現在中心性、そして共感性の弱さを特徴としたゆらぎ力学によって、心理・社会的均衡状態を保とうとする。従来の一極型アイデンティティ人間のように、明確な自己認識をもち、価値基準が一定で変わらないということではなく、環境や時代の変化、組織の構造改革や目標の変更、それに伴う人間関係の変化に対して柔軟に対応できる可能性をもっている分極型のゆらぎ人間。しかし、個人的判断、個人プレーでできる範囲の対応ならよいのだが、集団として仲間と一緒に事にあたらなければならない活動や仕事となると、分極型ゆらぎ人間の心理構造では対応に限界のでてくることがある。ゆらぎ人間それぞれの望むところは、基本的に自己中心性から発想される。それらが、集団として、また仲間同士で一致していればよいのだが、そのようなケースはまれであろう。したがって、ゆらぎ人間の集団で必要とされるのは契約である。それもみんなで決めた、あるいは同意した社会的契約である。

分極型のゆらぎ人間は、自分で必要とする以上の事はやらないし、余分なことはやる義務はないと考えるのが一般である。彼らに必要とされた以上のことを求める場合は、そのことを理解させ納得させた上で、それを達成する約束をさせることが必要なのである。契約を結ぶのである。この社会的契約が結ばれれば、その範囲内で彼らは仲間と連携し活動や仕事を続けていく。ただ、彼らの

本質は自己中心性であるとともに現在中心性でもある。したがって、この社会的契約は一般に期限つきで有効である。半永久のものではない。だから、ある一定の期間が過ぎたら条件を整えて再び契約することが必要となる。

こうした契約の更新は必要なことなのだが、それだけが続けていくのはあまり合理的ではない。そこで、そうした手続きを少なくするために、分極型アイデンティティの心理構造の1つである共感性の弱さの特性を変えていくことが求められる。他者と社会的契約を結び、連携して活動していくためには、他者に共感できる最小限の能力が必要である。この共感性を獲得していくことが、ゆらぎ人間が自立していく上で最も大切な心理特性といえるのではないだろうか。自己中心性の時代から共感的相互理解の時代へ。私たちの社会は、若者の自己中心主義に変化を求める時期にきていると思う。共感性こそ、柔軟なアイデンティティを形成し、ゆらぎ人間としての自立を支える重要な心理特性といえるだろう。

ゆらぎ人間と社会 どのようなゆらぎ人間の存在を許すかは、その社会の判断にかかっているといえる。ゆらぎ人間と社会とのかかわりについては、次のように考えることができる(武者, 1980)。すなわち、ゆらぎ人間を幅広く受け入れる社会は、それだけ個性の分布する範囲が広いので、そのぶん例えば犯罪のような逸脱した行動の発生率やその凶悪ぶりも大きいかもしれない。しかし、その一方で豊かな個性も育って、優れた人物が出てくる素地もあるのである。それだけやりがいのある社会だともいえるわけだ。善悪両方向へのゆらぎの中から、どの部分を生かし、どの部分を抑えるかによって、その社会の進化する方向が決まるわけで、どのような方向に選択原理を機能させるかが、その社会のもつ特異性を決めることになるといえるのである。その前提条件として、個性のゆらぎをまず許容することが必要だといえるだろう。ゆらぎは、ランダムに発生していた方が安全である。ゆらぎの発生そのものをコントロールするのは、むしろ危険をはらむことになる。ゆらぎの発生そのものを精神面からコントロールするのは、方向づけられた教育といえるだろう。

一方、個性のゆらぎをあまり受け入れない社会では、人は他人と違っていることを避けようとして、なるべく自分の個性を標準に合わせようとする。服装や興味関心、ものの考え方や発想まで同じようになっていく。人間関係にも過度に気をつかうようになる。他人に強い関心をもつ一方で、

極端に個性的な人が少なくなっていく。結果として、過度の競争から心身を消耗することなく、また凶悪な犯罪も少なく、平均化した社会が出現してくるかもしれない。しかし、精神文化の面でも科学技術の面でも、質的な飛躍はまれにしか起らなくなると考えられるのである。

いわば健康なゆらぎ人間を広く受け入れ、そのような人間を育成していく社会こそ、秩序と無秩序、安定と不安定、建設と破壊を内包するカオスの時代を生き抜いていく社会、混迷の21世紀を支えていく社会といえるのではないだろうか。いいかえれば、カオスの時代、混迷の21世紀に柔軟に対応し、適応していけるのは、一極型のアイデンティティ人間より分極型のアイデンティティをもった「ゆらぎ人間」なのかもしれない。

エピローグ

一連の研究から、モラトリアムにある若者の自立の心理をアイデンティティの形成と拡散の観点から見つめ、自立にゆらぐ彼らの心理を分析してきた。男のモラトリアムとしてピーター・パン・シンドローム、ナルシズム、そしてスチューデント・アパシーの心理を分析し、男として自立していくことにゆれる心理をみてきた。女のモラトリアムとしてシンデレラ・コンプレックス、成功回避動機、そして思春期やせ症の心理を分析し、女として自立していくことにとまどう心理をみてきた。これらの研究から、私たちはカオスとゆらぎの心理にたどり着いたのである。

混沌とした予測不能性を孕むカオスの世界は、私たちの現在から未来へとつながるその世界を暗示しているかのようだ。秩序の中に起る無秩序、安定の中に起る不安定、規則性の中に起る突然の変化。カオスの世界とはそのような規則性と混沌を孕んだ世界であつた。そして、その本質はゆらぎにあつた。そうしたカオスの世界で生き抜く人間は、もしかするとこれまで私たちが考えていた自主的で自律的、明確な生き方をもったアイデンティティ人間ではないのかもしれない。少なくとも、そうしたタイプの人間だけではないといえるのではないか。

ゆらぎ人間。私たちが一連の研究からたどり着いた新しい心の世界をもった人間である。ゆらぎ人間とは、アイデンティティが分極している人間である。外界の変化に柔軟に対応できる内的世界をもった人間である。このゆらぎ人間が、カオス

の時代にうまく適応して、壊れそうで壊れず、彼らしい自己実現をめざして21世紀を生き抜いていく。さつそうとした姿ではないかもしれないが、ゆらぎながら歩を前に進めていく。そうした中で、彼らなりの新しい連携のかたちを作り上げられ、やがて時間的な展望も開かれていく。そう願わず

にはいられない。ゆらぎ人間は、現代青年について私たちが想定した1つの仮説的モデルといえるものである。素描的モデルなので、今後さまざまな批判を受けてさらに洗練したものに仕上げていく必要がある（永江, 2000）。

引 用 文 献

- 合原一幸 1993 カオス—まったく新しい創造の波 講談社
- 赤木美智男 1995 呼吸とカオス 数理科学, 381, 48-52.
- Barton, S. 1994 Chaos, self-organization, and psychology. *American Psychologist*, 49, 5-14.
- エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1978 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房
- 福島朋子 1992 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び発達の検討 発達研究, 8, 67-87.
- Frank, M. & Phyllis, A. (Eds.) 1997 *The psychological meaning of chaos: Translating theory into practice*. Washington, DC : American Psychological Association.
- Gayton, W.F., Havu, G., Barnes, S., Ozman, K.L., & Bassett, J. 1978 Psychological androgyny and fear of success. *Psychological Report*, 42, 757-758.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 72-76.
- 武者利光 1980 ゆらぎの世界—自然界の1/fゆらぎの不思議 講談社
- 武者利光 1998 ゆらぎの発想—1/fゆらぎの謎にせまる 日本放送出版協会
- 武者利光 1999 人が快・不快を感じる理由 河出書房新社
- 永江誠司 2000 男と女のモラトリアム—若者の自立とゆらぎの心理 ブレーン出版
- 中里至正・松井 洋 1999 日本の若者の弱点 毎日新聞社
- 岡本祐子 1997 中年からのアイデンティティ発達の心理学—成人期・老年期の心の発達と共に生きることの意味 ナカニシヤ出版
- 小此木啓吾 1978 モラトリアム人間の時代 中央公論社
- パーシヴァル, I. 現実世界のカオス ホール, N. (編) 宮崎 忠 (訳) 1994 カオスの素顔—量子カオス, 生命カオス, 太陽系カオス 講談社, Pp.15-32.
- Pool, R. 1989 Is it healthy to be chaotic? *Science*, 243, 606-607.
- 千石 保 1998 日本の高校生—国際比較でみる 日本放送出版協会
- 徳永隆治 1993 カオスの基礎 合原一幸 (編著) ニューロ・ファジィ・カオス—新世紀のアナログコンピューティング入門 オーム社, Pp. 137-182.
- 和田孝雄 1997 生体のゆらぎとリズム—コンピュータ解析入門 講談社
- 渡邊恵子 1994 自立と自己の性の受容 (3) 一性差・発達差の検討 日本女子大学紀要, 人間社会学部, 4, 261-275.